

## 青年期における特性罪悪感の構造<sup>1)</sup>

### ——罪悪感の概念整理と精神分析理論に依拠した新たな特性罪悪感尺度の作成

大 西 将 史

神戸大学大学院総合人間科学研究科

本研究の目的は、第1に従来の罪悪感尺度を取り上げ、それらの測定している概念を整理することである。その上で第2に、特性罪悪感を測定する多次元からなる尺度(TGS)を作成し、その信頼性および妥当性を確認することである。精神分析理論に依拠し、特性罪悪感の下位概念として「精神的罪悪感」、「利得過剰の罪悪感」、「屈折的甘えによる罪悪感」、「関係維持のための罪悪感」の4つを設定し項目を収集した。合計793名の大学生に質問紙調査を行った。探索的因子分析および確認的因子分析の結果から、仮定した4因子モデルの妥当性が確認された。 $\alpha$ 係数、再検査信頼性係数は十分な値を示し、信頼性が確認された。また、PFQ-2-guilt scaleとの関連から併存的妥当性が確認され、PFQ-2-shame scale、心理的負債感尺度、自己評価式抑うつ性尺度との関連から収束的妥当性が、罪悪感喚起状況尺度との関連から弁別的妥当性が確認された。

キーワード：罪悪感の概念整理、特性罪悪感、特性罪悪感尺度(TGS)、信頼性、妥当性

#### 問 題

我々は何か悪いことをしたり、人に迷惑をかけたりすると、罪悪感に苛まれる。罪悪感を感じると、責任を感じたり、やってしまったことを訂正するといった補償行動へ動機づけられる(Baumeister, Stillwell, & Heatherton, 1994)。その一方で、罪悪感とは自分への怒り、周囲からの孤立感、道徳規範を逸脱したというような自己否定的な感情が伴い、苦痛な感情であるため、抑うつなどの精神病

理に結びつくことが指摘されている(Freud, 1917 井村訳 1970; 木村, 1972)。このように、罪悪感とは他者との相互的な社会的関係を成立させるために必要不可欠な道徳的感情であるとともに、精神病理と結びつくという2側面がある。

これまでの罪悪感に関する実証的研究では、罪悪感に関する個人差を自己記述式の尺度項目によって測定する方法が一般的であり、欧米を中心として様々な理論的立場から多くの尺度が開発されている。しかしながら、それらの尺度は罪悪感のどのような側面を測定しているのか不明確であり、得られた結果も一致していない。

従来の尺度の代表的なものとして、① Harder & Lewis (1987) による Personal Feelings Questionnaire (以下 PFQ)、② Tangney, Wagner, & Gramzow (1992) による Test of Self-Conscious Affect (以下 TOSCA)、③ Kugler & Jones (1992) による Guilt

1) 本論文は、神戸大学大学院総合人間科学研究科に提出した修士論文(2004年度)の一部を加筆修正したものです。本論文作成にあたり、ご指導いただきました神戸大学大学院発達環境学研究科准教授 谷冬彦先生に深く感謝致します。また、審査の過程で貴重な示唆を与えて下さった審査委員の先生方にお礼申し上げます。

Inventory (以下 GI), ④有光 (2002) による罪悪感喚起状況尺度 (Situational Guilt Inventory: 以下 SGI) の4尺度がある。なお, ③ GI は, “最近犯した違反について今現在感じている罪の感情”である状態罪悪感 (state guilt), “即時的な状況を越えて持続する罪の感覚”である特性罪悪感 (trait guilt), “特定の行動や信条とは関連しない道徳的規則への同意”である道徳的規範 (moral standard) の3下位尺度から構成される。

これらの尺度の測定している概念について整理する際に, 不安における“状態”と“特性”の区別 (Spielberger, Gorsuch, & Lushene, 1970) が有効であると考えられる。Spielberger et al. (1970) によると, 両概念は, 即時的なものであるか否かによって区別される。状態不安は, “今, 現在の不安状態”であるため, どのような状況に置かれているかという状況規定が大きな意味を持っており, 様々な状況によってその測定値は変化する。これに対して, 特性不安は, 状況によって影響を受けず, 時間を通して安定しており, 不安に関するパーソナリティ特性を意味する (Spielberger et al., 1970)。

GIにおける特性罪悪感と状態罪悪感の区別は, 上記の議論と対応したものと考えられるため, 本研究でも, 両概念の定義を Kugler & Jones (1992) に依拠して次のようにする。すなわち特性罪悪感とは, “罪悪感に関する比較的安定したパーソナリティ特性であり, 即時的な状況を越えて内的に潜在する罪の感覚”を意味し, 状態罪悪感とは, “即時的な感情状態を反映した今現在感じている罪悪感の強度”を意味する。

これによると, PFQもGIの特性罪悪感尺度と同様に, 特定の状況設定がなされておらず, 普段どのように感じているかを評定させる形式であるため, 特性罪悪感を測定しているといえる。

これに対して, TOSCAとSGIは, 罪悪感を導くような複数の状況を提示している点で異なる。まず, TOSCAは, 罪悪感を導くような状況を示した

シナリオを提示し, そのような状況に置かれた際に, どのように感じたり, 行動したりするかを評定させる形式である。TOSCAは, 状況をどのように認知し判断するかについての個人差に着目した尺度であり, Tangney et al. (1992) は, この個人差を affective style (以下, 感情スタイルとする) としている。

次に SGI は, 罪悪感を導くような特定の状況を提示する点では TOSCA と共通しているが, “その状況におかれたときに, あなたはどの程度罪悪感を感じると感じますか” (有光, 2002 p. 150) と教示し, 罪悪感という用語を明示的に用いている点でやや異なる。有光 (2001a, 2001b, 2002, 2006) は, SGI によって測定される概念を “罪悪感特性” とし, この場合の特性を “状況を通じて罪悪感を感じる傾向” と定義している。さらに有光 (2006) は, “罪悪感特性” は特性罪悪感のようなパーソナリティ特性と異なる概念であることを示唆している。

いずれにせよ, TOSCA と SGI は, 罪悪感を導くような状況を複数提示し, それらの評定値を加算していることから, 通状況的な罪悪感の経験しやすさを測定していることになるであろう。本研究では, Tangney et al. (1992) に依拠し, これを状況の判断による感情経験傾向を意味する感情スタイルと呼ぶことにする。感情スタイルは, 罪悪感に関する特性の1つと考えられるが, 状況認知や責任帰属に焦点づけられた特性であり, 一般的なパーソナリティ特性を意味する特性罪悪感とは区別する必要がある。特に, SGI は罪悪感喚起状況尺度という名前の通り, 罪悪感の喚起状況に対する判断傾向という意味合いが強いため, SGI によって測定される概念は, 一般的なパーソナリティ特性とは明確に異なるであろう。

以上のように先行研究を整理すると, これまで開発された測定尺度は, 一時的感情状態を意味する状態罪悪感 (state guilt) を測定するものと, 罪悪感に関する何らかの特性 (dispositional guilt) を

測定しているものに大別できる。後者はさらに、測定形式によって2つに区別できる。1つ目は、従来のパーソナリティ尺度と同様に、状況規定性のない測定形式を採用しているのものである。これは、罪悪感に関するパーソナリティ特性を意味する特性罪悪感 (trait guilt) を測定している。2つ目は、特定の状況を提示し、それについて判断を求める形式を採用しているものである。これは状況の判断による感情経験傾向を意味する感情スタイルを測定している。

感情スタイルに関する実証的研究は、欧米においては TOSCA を用いた一連の研究 (Tangney, 1991, 1995; Tangney et al., 1992) があり、様々な知見が蓄積されている。また、日本でも、我が国独自の尺度である SGI を用いて多くの知見が得られている (有光, 2001a, 2001b, 2002, 2006)。SGI は、感情スタイルを多次元から測定することが可能であり、欧米の尺度では見出されなかった因子が見出されている点が特徴である。

これに対して、特性罪悪感に関しては、PFQ の改訂版である PFQ-2 (Hardar & Zalma, 1990) や GI の特性罪悪感尺度を用いて様々な研究が行われている (Harder, Cultler, & Rockart, 1992; Hardar & Zalma, 1990; Jones & Kugler, 1993; Jones, Kugler, & Adams, 1995; Kugler & Jones, 1992)。しかし、日本においては、これらの尺度の邦訳版 (石川・内山, 1999; 佐藤・三宅, 1999) を用いた研究がわずかになされているに過ぎず、これらについても項目の内容的妥当性や、多次元性を考慮していないなど様々な問題が指摘されている (大西, 2006)。

このように、感情スタイルについては我が国において多くの研究がなされているが、特性罪悪感についてはわずかに過ぎないという状況である。特性罪悪感を取り上げることによって、罪悪感を感じる主体のパーソナリティ特性に焦点を当てることができ、自己形成や対人関係などとの関係をパーソナリティ発達という視点から検討することができると考えられる。また、特性罪悪感と抑う

つ傾向や不安傾向が正の相関を示すことが見出されており (Hardar & Zalma, 1990; Kugler & Jones, 1992)、精神病理の理解につながる実証的な知見を提供できると思われる。さらに、特性罪悪感の特徴として、自己の不適切な行為や思考、感情などを内的に制御するのに寄与することが指摘されており (Izard, 1991 荘巖監訳 1996)、非行や犯罪などについて実証的な知見を提供できるかもしれない。このように、特性罪悪感について研究することは有益である。

ところで、文化的背景の差異によって罪悪感の形態や体験様式が異なることが、様々な理論的立場から指摘されている。

土居 (1971) は、精神分析理論の立場から、罪悪感が所属集団の信頼を裏切るのではないかという自覚から生じる点では通文化的であるが、キリスト教社会である西欧文化においては神 (あるいはそれを内面化した規範意識) との関係において罪悪感が体験されるのに対して、日本文化においては他者との関係において体験されることを指摘している。

また、木村 (1972) は、現象学的精神医学の立場に立ち、自己の存立の根拠という観点から、西欧における神との関係で体験される罪悪感と、日本における他者との関係において体験される罪悪感を対比的に論じている。

文化心理学の立場からは、優勢となる文化的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) の差異によってこれらを説明している (北山, 1998)。北山 (1998) によると、西欧社会においては、相互独立的自己観が優勢であるため、独立した個人の内的な道德規範との関係で罪悪感が体験されるのに対して、日本においては、相互協調的自己観が優勢であるため、“負い目”や“申し訳ない”といった相互に協調的な対人関係を基盤とした罪悪感がみられるという。

このように、罪悪感について研究する際には、背景となる文化の特質を考慮することが必要であ

るが、個人のパーソナリティ特性である特性罪悪感を取り上げる場合には、このような視点は特に重要なものであろう。

そこで以下では、日本文化の特質を考慮した特性罪悪感を多次元から測定できる尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。尺度構成に当たっては、罪悪感についてパーソナリティ特性的な観点から議論が行われている精神分析理論を援用し下位概念設定を行う。精神分析理論では、様々な種類の罪悪感について議論がなされており、それらを考慮することで特性罪悪感を多次元から捉えることが可能である。

まず、以下に精神分析理論として提出された罪悪感に関する議論を整理し、特性罪悪感の下位概念設定を行う。

Erikson (1959) は、Freud, S. の心理学的発達理論を発展させ、心理社会的発達理論を提出した。そして漸成発達図式の第Ⅲ段階において、積極性対罪悪感という対概念になった危機が顕在化してくるとしている。Erikson (1959) によると、社会の中で積極的に自分を表現することや自分で何かを決めてやろうとすることがエディプスの願望に結びつき、罪悪感が生じてくると規定されている。そして、第Ⅲ段階における危機をうまく克服できない場合には、罪悪感の対象の定まらない漠然としたものとなって病理的なパーソナリティを形成するという。このような罪悪感とは、これまで指摘されてきた罪悪感の不適応的側面を表していると考えられる。よって、精神内における漠然とした罪悪感として「精神的罪悪感」を下位概念に設定する。

Modell (1971) は、罪悪感を古典的精神分析理論におけるエディプス葛藤との関連ではなく、自分が他人よりも多くの良いものを所有していることによって生じてくると規定した。岡野 (1998) は、Modell (1971) による罪悪感の議論を援用し、“罪悪感とは、自分が存在していることや自分の行った行為のために、自分が他人よりも多くの満足

体験を持ったり、他人が自分より多くの苦痛体験を持つことにより引き起こされる苦痛の感覚である” (p. 104) と再定義している。このような罪悪感とは、他者に対する不均衡の感覚として潜在化すると考えられるが、上の精神的罪悪感とは異なり他者への配慮が含まれているため、病理的な傾向に必ずしも直結するものではないと考えられる。よって、自己と他者との間の不均衡の感覚に基づく罪悪感として「利得過剰の罪悪感」を下位概念に設定する。

土居 (1994) は、日本人が謝罪の際に用いる「すまない」が、相手に対する罪悪感の表明と謝罪を意味しながらも、背後には「甘え」とその不満によるアンビバレントな感情として「敵意」が存在していることを指摘している。つまり、「甘え」の不満のために相手を「恨み」、「敵意」を向けたとしても、その根底には甘えたい欲求があるために、「敵意」はその反面である罪悪感を導くと考えられる。よって、「甘え」と「恨み」のアンビバレンスに由来する「屈折的甘えによる罪悪感」を下位概念に設定する。

北山 (1992) は、日本語臨床の立場から「すまない」という用語に着目し、そこに相手への謝罪の意味とともに関係を乱すことへの懸念があることを指摘している。このことから、相手への批判や要求をする際に、それがたとえ正当なものであっても、それまでの相手との関係を悪くしてしまうのではないかという懸念から罪悪感が生じてくると考えられる。よって、「関係維持のための罪悪感」を下位概念に設定する。

以上のように罪悪感に関する4つ議論を取り上げたが、これらの文化的特徴については、以下のように考えられる。「精神的罪悪感」は、その根本に精神分析の中で理論的にも臨床的にも伝統的に用いられてきたエディプス葛藤の理論があり、おそらく通文化的な罪悪感と考えられるであろう。「利得過剰の罪悪感」は、自分だけが利得を得ていることへの不均衡感にもとづく罪悪感であるた

め、社会的存在である人間に共通した通文化的な罪悪感と考えられるかもしれない。しかし、精神的罪悪感とは異なり、罪の意識が他者との関係の中で生じ、他者へと向かうという点では、関係志向的な日本文化の特徴がより表れやすいとも考えられる。「屈折的甘えによる罪悪感」については、「甘え」は人間存在に普遍的な感情であるが、日本文化においては「甘え」が許容され、「甘え」と「恨み」のアンビバレンスがなじみ深いという議論（土居，2000）を考慮すると、日本文化的な特徴を表していると考えられるであろう。最後に、「関係維持のための罪悪感」は、関係を維持するための重要な要請として自己を統制する機能を有していると考えられ、関係の中で自己が規定される日本文化の特徴を表す罪悪感と考えられるであろう。

以上のように、特性罪悪感について「精神的罪悪感」、「利得過剰の罪悪感」、「屈折的甘えによる罪悪感」、「関係維持のための罪悪感」の4下位概念を設定した。以下では、この4下位概念を測定する尺度を作成し、その信頼性および妥当性を検討する。

## 方 法

### 1. 下位概念設定の妥当性検討と項目の内容的妥当性の検討

上で設定した4下位概念の妥当性について、パーソナリティ心理学を専門とする大学教員1名および、心理学を専攻する大学院生2名により、下位概念を導いた理論と整合しているか検討が行われた。その結果、下位概念設定が妥当であると判断された。

次に、上で設定した下位概念について、項目を収集した。「精神的罪悪感」については、Erikson (1959) の第Ⅲ段階に関する記述と、谷 (1997) によって作成された尺度項目を参考に作成した。「利得過剰の罪悪感」については、他者との関係の中で、自分だけが良い思いをしているようで罪

悪感を感じるという図式に項目内容を統一した。「屈折的甘えによる罪悪感」では、敵意を含む「屈折的甘え」（谷，2000）の表現として、土居 (1971, 2001) および谷 (2000) の記述を参考に、「恨む」、「憎む」、「すねる」、「ひねくれる」、「ふてくされる」、「むかつく」の6単語を選定し、それぞれ2種類ずつ計12項目を作成した。「関係維持のための罪悪感」については、正当性があるにもかかわらず、相手との関係を乱してしまうことへの懸念から罪悪感を感じるという図式になるように、項目内容を統一した。4下位尺度それぞれに12項目、合計48項目を作成した。これらの項目についても、パーソナリティ心理学を専門とする大学教員1名および、心理学を専攻する大学院生2名により、特性罪悪感の定義および各下位概念の定義との整合性という観点から検討され、不適切な項目については内容を修正し、内容的妥当性が確認された。

### 2. 調査協力者

近畿圏内の大学生・大学院生793名（男353名、女440名、18~27歳、平均年齢20.30歳）。

### 3. 測定尺度

#### ①特性罪悪感を測定する項目

「精神的罪悪感」、「利得過剰の罪悪感」「屈折的甘えによる罪悪感」、「関係維持のための罪悪感」、の4下位概念ごとに、それぞれ12項目、計48項目。「全くない」「まれにある」「時々ある」「しばしばある」「いつもある」の5段階（1~5点）で評定を求めた。

#### ②PFQ-2

罪悪感と恥は同時に生起することが多く、先行研究においても両概念は正の相関を示しているため、新たに作成した尺度の構成概念的妥当性の確認に用いる。PFQ-2は項目数が少なく（shame scaleが10項目、guilt scaleが6項目）内容も簡便であるため、筆者が邦訳を行い、パーソナリティ心理学を専門とする大学教員1名と心理学を専攻する大学院生2名により翻訳内容の妥当性確

認が行われた。5段階（1～5点）で評定を求めた。

### ③心理的負債感尺度

心理的負債感とは、互惠規範の存在を前提としており、援助者に返報する義務がある状態 (Greenberg, 1980) を意味し、他者からの好意や援助に対する負い目の感覚であると定義される (相川・吉森, 1995)。よって、そのような負い目の感覚は、罪悪感に結びつくと考えられ、特性罪悪感尺度と関連することが予想される。本研究では、相川・吉森 (1995) による心理的負債感尺度 18 項目を用いる。6 段階（1～6 点）で評定を求めた。

### ④自己評価式抑うつ性尺度 (Self-rating Depression Scale ; 以下 SDS)

先行研究において、PFQ-2 の guilt scale や GI の特性罪悪感尺度が抑うつ傾向と正の相関を示すことが見出されているため、抑うつ傾向との関連を検討する。本研究では、Zung (1965) によって作成された 20 項目からなる尺度の邦訳版 (福田・小林, 1973) を用いる。4 段階（1～4 点）で評定を求めた。

### ⑤罪悪感喚起状況尺度 (SGI)

SGI は、感情スタイルを測定する尺度であるため、新たに作成した尺度の弁別的妥当性を確認するために用いる。有光 (2002) において確認的因子分析で選択された「他傷 (8 項目)」、「他者への配慮不足 (7 項目)」、「利己的行動 (10 項目)」、「他者への負い目 (6 項目)」の合計 31 項目を用いる。4 段階（1～4 点）で評定を求めた。

## 4. 調査手続き

特性罪悪感を測定する 48 項目に関しては、全調査協力者が答えたが、②～⑤の尺度に関しては、調査協力者の負担を軽減するために、調査協力者によって異なる組み合わせで実施した。その結果、各尺度の調査協力者は、SDS, SGI で 306 名 (男 104 名, 女 202 名, 18～25 歳, 平均年齢 20.20 歳), PFQ-2, 心理的負債感尺度で 287 名 (男 173 名, 女 114 名, 18～27 歳, 平均年齢 20.55 歳) であった。また、特性罪悪感の因子分析は、全調査対象

者のうち、重複のない 541 名 (男 260 名, 女 281 名, 18～26 歳, 平均年齢 20.23 歳) のデータについて行った。さらに、上記の調査協力者とは別に、200 名 (男 76 名, 女 124 名, 18～27 歳, 平均年齢 20.09 歳) に対して、特性罪悪感 48 項目のみを 3 週間間隔で 2 回実施した。質問紙は、講義時間に配布し、集団的に実施した。調査時期は、2004 年 12 月～2005 年 7 月であった。

## 結 果

### 1. 特性罪悪感の因子構造の検討

#### (1) 特性罪悪感の探索的因子分析

541 名のデータを分析対象とし、特性罪悪感 48 項目について主因子法による探索的因子分析を行ったところ、固有値が 1 以上となる 4 因子解が適切であると判断し、その後 Promax 回転を加えた。次に、当該因子への負荷量が .5 未満の項目、複数の因子にまたがって負荷を示す項目、内容的に重複する項目の片方の合計 22 項目を削除した。残った 26 項目について再度 4 因子解で因子分析 (主因子法・Promax 回転) を行った結果を Table 1 に示す。回転前の 4 因子の累積寄与率は、62.90% と十分に高い値を示した。各因子を構成する項目は、それぞれ、「利得過剰の罪悪感 (7 項目)」、「屈折的甘えによる罪悪感 (6 項目)」、「精神内的罪悪感 (7 項目)」、「関係維持のための罪悪感 (6 項目)」の各項目と完全に一致していた。したがって、第 1 因子は「利得過剰の罪悪感」、第 2 因子は「屈折的甘えによる罪悪感」、第 3 因子は「精神内的罪悪感」、第 4 因子は「関係維持のための罪悪感」、とそれぞれ命名した。

因子間相関、下位尺度間相関および各尺度得点の平均値 (SD) を Table 2 に示す。因子間では、 $r_{5.439, .601}$  の相関がみられ、下位尺度間では  $r_{5.423, .564}$  の 0.1% 水準で有意な正の相関がみられた。以上の結果から、26 項目 4 下位尺度をもって、特性罪悪感尺度 (Trait Guilt Scale : 以下 TGS) とする。

**Table 1** 特性罪悪感尺度の Promax 回転後の因子パターンおよび確認的因子分析結果 (n=541)

	F1	F2	F3	F4	CF <sup>a)</sup>
<i>利得過剰の罪悪感 (7 項目) α=.890</i>					
G10 <sup>b)</sup> 自分だけが目をかけてもらっているようで、他の人に対して申し訳なく思う	<b>.83</b>	.00	.01	-.06	.81
G8 人よりもいい思いをしているようで、うしろめたく感じる	<b>.83</b>	.05	.01	-.10	.81
G12 自分の方が、得をしているようで、相手に申し訳なく思う	<b>.75</b>	-.03	.11	-.02	.81
G3 自分ばかりよくしてもらっているようで、他の人に対して申し訳なく思う	<b>.75</b>	.02	-.04	.01	.73
G11 みんなの中で自分だけが得をしているようで、他の人にうしろめたく感じる	<b>.71</b>	-.04	.16	-.06	.79
G2 みんな同じようにやっているのに、自分だけが誉められて他の人にすまないと思う	<b>.66</b>	-.07	-.11	.14	.60
G6 同じ立場なのに、特別扱いをされると他の人に罪悪感を感じる	<b>.58</b>	.08	-.08	.18	.64
<i>屈折の甘えによる罪悪感 (6 項目) α=.914</i>					
A10 ひねくれたあとで、相手に対してうしろめたく思う	.01	<b>.85</b>	.03	-.07	.83
A12 すねたような態度をとったあとで、相手に対して申し訳なく思う	-.07	<b>.84</b>	.04	.01	.83
A9 ふてくされた態度をとっていても、あとで悪かったと思う	-.10	<b>.83</b>	.05	-.02	.79
A11 恨みを抱いていた相手に対して、あとですまないと思う	.03	<b>.83</b>	-.06	-.03	.79
A7 人に対して憎しみを向けていたが、あとになって罪悪感を感じる	.05	<b>.72</b>	.01	.06	.79
A8 相手に対してむかついていても、あとですまないと思う	.10	<b>.68</b>	-.06	.11	.77
<i>精神的罪悪感 (7 項目) α=.866</i>					
I4 何か過ちを犯しているようで、罪悪感を感じる	-.01	-.05	<b>.76</b>	.01	.72
I5 自分のしていることが何かまちがっているようで、いけないと思う	-.04	.05	<b>.73</b>	-.01	.70
I1 何かにつけて、いけないことをしているのではないかと思う	-.09	-.03	<b>.70</b>	.06	.65
I10 何となく罪悪感を感じて、いろいろな物事に積極的に取り組めない	.09	-.03	<b>.68</b>	-.01	.73
I11 何かにつけて気がとがめられる	.07	.03	<b>.68</b>	.00	.76
I8 しばしば取り返しのつかないことをしてしまったように思えて、罪悪感を感じる	.00	.02	<b>.58</b>	.10	.66
I7 自分で決めて何かをしようとする、何となく罪悪感を感じる	.06	.05	<b>.54</b>	.02	.64
<i>関係維持のための罪悪感 (6 項目) α=.881</i>					
R8 相手に悪いと思って、誤りを指摘することにためらいを感じる	.01	.03	-.01	<b>.88</b>	.84
R12 正しいことだと分かっている、相手に悪いと思って言い出しにくいと思う	.01	.08	-.02	<b>.78</b>	.84
R7 全く正しいことなのに、相手にすまないと感じて言い出しづらと思う	.03	.04	.02	<b>.77</b>	.81
R4 本当のことでも、それをあからさまに相手に伝えることに罪悪感を感じる	-.00	-.08	.02	<b>.74</b>	.69
R2 相手の明らかな間違いでも、それを指摘することにすまないと感じる	-.04	-.01	.07	<b>.68</b>	.68
R9 怒って当然のことでも、いけないと思って相手にぶつけることを遠慮しがちである	.01	-.02	.07	<b>.58</b>	.62

注. a) CF 列における値は、確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis) における当該因子への因子負荷量を表す。なお、他の因子への負荷は 0 として分析を行った。

b) G: guilt of excessive Gain A: guilt of refracted Amai I: Intrapyschic guilt R: guilt for Relation maintenance。項目番号は、48 項目作成時のものである。

**Table 2** 特性罪悪感尺度の因子間相関 (右上), 下位尺度間相関 (左下) および平均値 (SD) (n=541)

	利得過剰	屈折	精神的	関係維持	全体尺度
利得過剰の罪悪感	1.000	.494	.601	.439	
屈折の甘えによる罪悪感	.462 ***	1.000	.451	.568	
精神的罪悪感	.551 ***	.429 ***	1.000	.568	
関係維持のための罪悪感	.423 ***	.564 ***	.544 ***	1.000	
平均値 (SD)	13.7 (5.0)	14.4 (5.0)	13.9 (5.3)	15.9 (5.0)	57.8 (16.1)

\*\*\*p<.001

## (2) TGS の確認的因子分析

探索的因子分析において、因子間に比較的高い正の相関がみられたことから、確認のため、潜在変数を1つとした1因子モデルについて、541名のデータを対象に確認的因子分析を行った。その結果、適合度指標の値は GFI=.539, AGFI=.459, RMSEA=.140 といずれも適合度が低いことを示唆しており、1因子モデルを採用すべきではないと判断した。

次に、探索的因子分析で得られた4因子を潜在変数とし、それらからその潜在変数を構成する当該項目（観測変数）にのみパスを引いたモデルについて、さきほどと同様に541名のデータを対象に分析を行った<sup>2)</sup> (Table 1)。すべてのパス係数および相関係数は、0.1%水準で有意であった。モデルの適合度指標の値は、GFI=.885, AGFI=.863 と若干低いが、RMSEA は .058 であった。GFI および AGFI の値は観測変数の数が多くなると低くなる性質があるため（豊田, 1998）、確認的因子分析モデルを評価する際には観測変数の数に影響を受けない適合度指標である RMSEA に着目する。豊田 (1998) によると、RMSEA の値が .050 以下の場合適合度が高く、.100 以上では適合度が低いと判断される。また、山本・小野寺 (2002) では、.080 以下であれば適合度が高く、.100 以上ではモデルを採択すべきではないと指摘されている。これらの基準から、このモデルの適合度が十分許容できると判断できる。各因子間には、探索的因子分析の結果と同様に、 $r=.48\sim.63$  の比較的高い正の相関がみられたが、4つの下位尺度は相互に強く関連

しあいながらも独立していると判断した。

## 2. 内的整合性の検討

尺度の内的整合性を意味する  $\alpha$  係数は、「利得過剰の罪悪感」で .890, 「屈折的甘えによる罪悪感」で .914, 「精神的罪悪感」で .866, 「関係維持のための罪悪感」で .881 と、いずれも高い値を示した。また、全体尺度で .936 という値を示し、内的整合性という面で十分な信頼性を備えていることが確認された。

## 3. 経時的安定性の検討

第1回調査、第2回調査それぞれにおける TGS の得点について、各下位尺度および全体尺度の相関係数を算出し、それを再検査信頼性係数とした。その結果、利得過剰の罪悪感で .759, 屈折的甘えによる罪悪感で .731, 精神的罪悪感 .797, 関係維持のための罪悪感で .778, 全体尺度で .826 であり、再検査信頼性係数は十分な値であった。

次に、第1時点と第2時点のデータ ( $n=200$ ) それぞれについて、4因子解で探索的因子分析（主因子法・Promax 回転）を行った。その結果、時系列による因子パターンの変化はなく、2時点のデータはともに541名のデータについての因子分析結果と完全に一致する4因子構造であった。2時点のデータについて、Wrightley & Neuhaus (1955) による因子負荷量の一致性係数を算出したところ、利得過剰の罪悪感で .983, 屈折的甘えによる罪悪感で .954, 精神的罪悪感で .981, 関係維持のための罪悪感で .956 といずれも高い値を示した。

以上から、TGS は十分な信頼性ととも、安定した4因子構造を備えていることが確認された。

## 4. 併存的妥当性の検討

PFQ-2-guilt scale との間には、全て 0.1% 水準で有意な相関がみられ、特性罪悪感尺度の併存的妥当性が確認された (Table 3)。精神的罪悪感との相関が最も高く ( $r=.805$ )、関連が強いことが示唆された。

2) 狩野・三浦 (2003) は、探索的因子分析結果を確認的因子分析によって検証すべきであるという主張 (Jöreskog & Lawley, 1968) にもとづき、探索的因子分析を行った上で、同一データに対して確認的因子分析を行っている。また、繁根・柳井・森 (1999) において、探索的因子分析と確認的因子分析を組み合わせることで、因子分析を質問紙作成などの実用的な目的に利用できることが指摘されている。本研究ではこれらにもとづいて分析を行った。



Table 3 特性罪悪感尺度と各尺度の相関

	利得過剰	屈折	精神的	関係維持	全体尺度
PFQ-2 (n=287)					
Guilt	.509***	.463***	.805***	.512***	.728***
Shame	.407***	.337***	.702***	.365***	.577***
心理的負債感 (n=287)	.211***	.328***	.229***	.282***	.332***
SDS (n=306)	.171**	.115*	.470***	.197**	.306***
SGI (n=306)					
他傷	.016	.170**	.046	.208***	.139*
配慮不足	.124*	.217***	.088	.212***	.203***
利己的	.137*	.196**	.101	.238***	.213***
負い目	.142*	.203***	.149**	.250***	.236***
SGI 全体	.129*	.228***	.114*	.265***	.233***

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$ 

## 5. 構成概念的妥当性の検討 (1) 収束的妥当性

### (1) PFQ-2-shame scale との相関

PFQ-2-shame scale との間にも、すべて 0.1% 水準で有意な正の相関がみられ、TGS の収束的妥当性が確認された (Table 3)。guilt scale との相関結果と同様に、精神的罪悪感が最も高い相関を示し ( $r=.702$ )、関連が強いことが示唆された。

TGS 各下位尺度および全体尺度いずれにおいても、guilt scale との相関係数の方が shame scale との相関係数に比べてより高い値であったが、このことを明確にするために、Ryan 法による相関係数の差の検定 (5% 水準) を行った。その結果、TGS 各下位尺度および全体尺度いずれにおいても、両尺度との間に有意差が認められた。よって、TGS は、shame scale よりも、guilt scale とより関連していることが示された。

### (2) 心理的負債感尺度との相関

心理的負債感尺度との間には、いずれも 0.1% 水準で有意な正の相関がみられ、TGS の収束的妥当性が確認された (Table 3)。屈折的甘えによる罪悪感と最も強く関連し ( $r=.328$ )、次いで関係維持のための罪悪感と関連が強いという結果が得られた ( $r=.282$ )。

### (3) SDS との相関

SDS との間には、全般的に有意な正の相関がみ

られた (Table 3)。特に、精神的罪悪感との間において相関が最も高かった ( $r=.470$ )。これは、精神的罪悪感の病的な特徴を表しており妥当な結果であるといえる。これに対して、関係維持のための罪悪感、利得過剰の罪悪感、屈折的甘えによる罪悪感という順で正の相関を示したが、いずれも値は小さかった (それぞれ  $r=.197, .171, .115$ )。

## 6. 構成概念的妥当性の検討 (2) 弁別的妥当性

SGI とは、全般的に低い正の相関を示した (Table 3)。このことから、TGS は SGI との間に弁別性を備えていることが確認された。屈折的甘えによる罪悪感と関係維持のための罪悪感、SGI の全下位尺度との間に低い値であるが、有意な正の相関がみられた。これに対して、精神的罪悪感と利得過剰の罪悪感では正の相関を示すものの、値が小さくほぼ無相関のものもみられた。

以上の結果から、TGS は、十分な内的整合性と継時的安定性、併存的妥当性および構成概念的妥当性を備えていることが確認された。さらに、TGS の各下位尺度は、妥当性検討のための尺度と異なる相関パターンを示していることから、それぞれ異なる意味内容をもっていることが示唆された。

## 考 察

ここでは、TGS と他の尺度との相関結果について

て考察を行う。

### 1. TGS と PFQ-2 との相関について

PFQ-2 との間には、TGS のいずれの下位尺度においても中程度から高い正の相関が得られた。また、統計的にも、shame scale とよりも guilt scale とより関連していることが確認された。

guilt scale との間には、精神的罪悪感において最も高い相関 ( $r=.805$ ) がみられ、高い関連性が示唆された。精神的罪悪感は、積極性を発揮することに対する罪悪感であるが、その内容は対象の定まらない漠然としたものである。これに対して PFQ-2 は、罪悪感を表現している形容詞を用いた極めて簡潔な内容である。このことから、両尺度が測定する罪悪感の抽象度が高い点で共通しており、それによってこのような高い相関がみられたのだと解釈できる。

shame scale との間にも、精神的罪悪感との間に高い相関 ( $r=.702$ ) がみられた。これは、精神的罪悪感が恥との弁別性に問題があることを示唆しているとも考えられる。しかし、これに関しては次のように考えることが可能であり、必ずしも精神的罪悪感の問題とは考えられない。第1に、shame scale の内容の妥当性に問題があるため、このような高い相関がみられたのだと考えられる。shame scale の中には、“自分が他人をうんざりさせているように感じる”ことがある、“絶望し混乱することがある”といった項目が含まれており、これらは罪悪感と見なされる内容である。第2に、第1の問題に起因して、PFQ-2 自体に、shame scale と guilt scale の弁別性に問題があるためだと考えられる。Hardar & Zalma (1990) の研究では、shame scale と guilt scale との間には  $r=.52$  という相関が確認されており、両者の弁別性に疑問が残るとされている。これに関して、PFQ-2 のような簡便な内容の形容詞について評定させる形式では、抽象的な文脈から両感情を分類する能力が要求され、現実的にそれが困難であるとの指摘もある (Tangney & Dearing, 2000; Tangney et al.,

1992)。本研究においては、 $r=.695$  というさらに高い相関がみられた。これは、状況依存的であることを特徴とする我が国の文化的特質 (北山, 1998) を反映しているのかもしれないが、いずれにせよ本研究においては、PFQ-2 自体に shame scale と guilt scale の弁別性に問題があったと考えられる。このように、精神的罪悪感と恥の弁別性については、PFQ-2 自体の問題に起因していると考えられるが、今後さらに検討していく必要があるだろう。

### 2. 心理的負債感尺度との相関について

心理的負債感とは、他者からの行為や援助に対する心理的負債の感じやすさ、既に自らの内に存在する心理的負債への耐性、心理的負債の低減欲求として返報行為への動機づけの程度という3側面からなる (相川・吉森, 1995)。よって、心理的負債感尺度との相関結果から、特性罪悪感の高い個人は、他者からの好意や援助を負担に思う傾向や、それに対して返報行為を通して低減しようとする傾向があることが示唆された。このような他者への負担感が、他者に対する申し訳なさとして体験されるために、心理的負債感と特性罪悪感が正の相関を示したと解釈できる。

屈折的甘えによる罪悪感が相対的に相関が高かったことについては、他者への「敵意」としての「甘え」を向けたことに対する負目感覚が心理的負債感と結びついたためと解釈できる。また、関係維持のための罪悪感とも正の相関を示したことについては、他者に負債を負っていることが、関係を悪くしてしまうのではないかという懸念に結びついたためと考えられよう。

### 3. SDS との相関について

SDS との間に全般的に正の相関がみられたが、精神的罪悪感との相関が最も高かった ( $r=.470$ )。精神的罪悪感とは、精神内における漠然とした罪悪感であり病理的特長を有しているため、このような相関を示したことは妥当であろう。また、日本人の罪悪感がメランコリー (うつ病) と高い関

連性があるという木村 (1972) の理論的・臨床的洞察とも一致するものである。

しかし、精神的罪悪感が恥との弁別性に欠けるためにこのような相関がみられたという可能性もある。Lewis (1971) によると、恥は全体的自己に対する否定的評価を伴うため抑うつ傾向と関連するのに対して、罪悪感はやってしまった行為に対する否定的評価が中心となるため自己への否定的な影響が小さく、抑うつ傾向との関連も小さい。しかし、両感情が相関を示すために、見かけ上罪悪感と抑うつ傾向とが相関を示すのであり、恥の影響力を取り除くと相関がみられなくなると考えられている (Tangney et al., 1992)。実際に、PFQ-2 を用いた研究において、これを支持する結果が得られている (Harder et al., 1992)。しかし、前述したように、PFQ-2 自体に shame scale と guilt scale の弁別性に問題があるためこのような結果になったとも考えられる。これに対して、GI の特性罪悪感尺度を用いた研究では、恥の影響力を取り除いても抑うつ傾向との間に高い相関を示した (O'Conner, Berry, & Weiss, 1999)。GI は、恥との弁別性について明確な努力のみられる尺度として評価されているため (Tangney & Dearing, 2000)、この結果は上の議論への反証となるだろう。

このように、特性罪悪感と抑うつ傾向との関連性について一貫した結果が得られていないため、精神的罪悪感と抑うつ傾向との相関が恥の影響によるものだとここで結論づけることはできないであろう。よって、これについても今後さらに検討していく必要があるだろう。

#### 4. SGI との相関について

SGI と全般的に正の相関を示しながらもいずれの値も低いという結果から弁別的妥当性が確認された。また、SGI 全体得点は SDS とほぼ無相関 ( $r = -.012$ ,  $n = 306$ ) であったことから、抑うつ傾向との関係においても、TGS と SGI は弁別されることが示唆された。これらの結果から、TGS によって測定される特性罪悪感、SGI によって測

定される感情スタイルと大きく異なることが明確になったと考えられる。

下位尺度についてみていくと、屈折的甘えによる罪悪感と関係維持のための罪悪感が SGI と有意な正の相関がみられたのに対して、精神的罪悪感と利得過剰の罪悪感では正の相関を示すものの、値が小さくほぼ無相関のものもみられた。このようになった理由としては、前者の 2 下位尺度が具体的な内容であり、罪悪感を感じる状況を想像しやすかったためと考えられる。これに対して後者の 2 下位尺度は、内容的に抽象度が高く、罪悪感を感じる状況について想像しづらかったためであろう。

また、SGI の他者への負目因子に着目すると、TGS の中でも関係維持のための罪悪感および屈折的甘えによる罪悪感が相対的に関連が強かった。他者への負目因子は、欧米の尺度にはみられない日本文化の特徴を反映したものと考えられているため (有光, 2002)、屈折的甘えによる罪悪感と関係維持のための罪悪感がこれと相対的に強い関連を示したことから、これら 2 つの特性罪悪感、日本文化の特徴を表していると考えられよう。ただし、利得過剰の罪悪感については、本研究の結果からはそのような特徴がみられなかった。

以上のように、TGS の各下位尺度は、妥当性検討のための尺度との関係から、それぞれ次のような特徴を有していることが示唆された。まず、精神的罪悪感、抑うつ傾向と最も強く関連しており、病理的特徴を有しているといえる。次に、屈折的甘えによる罪悪感および関係維持のための罪悪感、心理的負債感および SGI の他者への負目因子と相対的に強く関連していることから、負目という他者に向かう罪の感覚を包含しているといえる。関係維持のための罪悪感、これに加えて抑うつ傾向ともそれほど強くはないが関連していることから、他者との関係を懸念するために抑うつの特長をもつことが示唆された。最後に、利得過剰の罪悪感については、本

研究で用いた尺度との間にはそれほど特徴的な相関が得られなかったため、今後さらに検討する必要があるだろう。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、罪悪感の概念整理を行い、従来の罪悪感尺度の測定している概念を、状態罪悪感、特性罪悪感、感情スタイルに区別した。これまで、罪悪感のどの側面を測定しているか明確でなかったため、得られた知見も一致していなかった。対象とする概念を明確にすることによって得られた知見を整理することが可能であり、この点で罪悪感研究に対して本研究の果たした意義は大きいと思われる。

さらに、上の区別に従い、特性罪悪感尺度(TGS)を作成し、信頼性と妥当性を備えていることを確認した。TGSは、下位概念設定の際に精神分析理論を援用しているものの、パーソナリティ特性としての罪悪感を適切に測定することが可能な尺度である。また、日本文化の特質を考慮し、多次元から構成されているため、特性罪悪感をより包括的に捉えることが可能である。このように、TGSは従来の尺度と比較して有用な尺度であり、これを用いて、今後のパーソナリティ特性としての罪悪感研究に新たな知見を提供することができるであろう。最後に、有光(2002)は、TOSCAやSGIなどの感情スタイルを測定する尺度が他のパーソナリティ変数との相関が低いという問題点を指摘した上で、罪悪感に関してさまざまな調査方法を考案し、最も良い方法を探究する必要があると述べている。これを受け、本研究は、従来の罪悪感概念と測定方法の整理を行い、パーソナリティ特性としての罪悪感を測定する新たな尺度を開発した研究として位置づけられる。

今後の課題としては、まずTGSの妥当性検討をさらに続けることが挙げられる。また、下位尺度の文化的特徴についても実証的に検討していくことが必要であろう。その上で、本研究が依拠した精神分析的な罪悪感概念の有効性について実証的

に検討していくことも必要であろう。

具体的には、TGSを用いて、抑うつを含めた精神病理の生起および維持に関して、特性罪悪感がどのような役割を担っているかを検討することが挙げられる。また、特性罪悪感が自己形成や対人関係とどのような関係にあるかを検討することも今後の課題である。最後に、特性罪悪感が、自己の不適切な行為や思考、感情などを抑制することに寄与していることを実証的に検討していくことも必要であろう。

## 引用文献

- 相川 充・吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, **11**, 63-72.
- 有光興記 (2001a). 罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係 性格心理学研究, **9**, 71-86.
- 有光興記 (2001b). 罪悪感, 恥と精神的健康の関係 健康心理学研究, **14**, 24-31.
- 有光興記 (2002). 日本人青年の罪悪感喚起状況の構造 心理学研究, **73**, 148-156.
- 有光興記 (2006). 罪悪感, 羞恥心と共感性の関係 心理学研究, **77**, 97-104.
- Baumeister, R. F., Stillwell, A. M., & Heatherton, T. F. (1994). Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin*, **115**, 243-267.
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 (1994). 日常語の精神医学 医学書院
- 土居健郎 (2000). 土居健郎著作集2 岩波書店
- 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company.
- (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Freud, S. (1917). *Trauer und Melancholie*, GW, Bd. X. (フロイト, S. 井村恒朗 (訳) (1970). フロイト著作集6 悲哀とメランコリー 人文書院 pp. 137-149.)
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Greenberg, M. S. (1980). A theory of indebtedness. In K. J. Gergen, M. S. Greenberg, & R. H. Wills (Eds.), *Social exchange: Advances in theory and research*. New York: Plenum Press, Plenum, pp. 3-26.
- Harder, D. W., Cuitler, L., & Rockart, L., (1992). Assessment of shame and guilt and their relationships to psy-

- chopathology. *Journal of Personality Assessment*, **59**, 584-604.
- Harder, D. W., & Lewis, S. J. (1987). The assessment of shame and guilt. In J. N. Butcher, & C. D. Spielberger (Eds.), *Advances in personality assessment*. Vol. 6. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., pp. 89-114.
- Harder, D. W., & Zalma, A. (1990). Two promising shame and guilt scales: A construct validity comparison. *Journal of Personality Assessment*, **55**, 729-745.
- 石川隆行・内山伊知郎 (1999). 共感性・社会的責任感が大学生の罪悪感に及ぼす影響 日本心理学会第63回大会発表論文集, 923.
- Izard, C. E. (1991). *The psychology of emotions*. New York: Prenum Press.
- (イザード, C. E. 莊巖舜哉 (監訳) (1996). 感情心理学 ナカニシヤ出版)
- Jones, W. H., & Kugler, K. E. (1993). Interpersonal correlates of the Guilt Inventory. *Journal of Personality Assessment*, **61**, 246-258.
- Jones, W. H., Kugler, K. E., & Adams, P. (1995). You always hurt the one you love: Guilt and transgressions against relationship partners. In J. P. Tangney, & K. W. Fisher (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp. 301-321.
- Jöreskog, K. G., & Lawley, D. N. (1968). New methods in maximum likelihood factor analysis. *The British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*, **21**, 85-96.
- 狩野 裕・三浦麻子 (2003). AMOS, EQS, CALIS によるグラフィカル多変量解析 [増補版] 現代数学社
- 木村 敏 (1972). 人と人との間 弘文堂
- 北山 修 (編) (1992). ことばの心理学 日常臨床語辞典 イマーゴ増刊, 3, 青土社
- 北山 忍 (1998). 自己と感情 共立出版
- Kugler, K. E., & Jones, W. H. (1992). On conceptualizing and assessing guilt. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 318-327.
- Lewis, H. B. (1971). *Shame and guilt in neurosis*. New York: International Universities Press.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Modell, A. H. (1971). The origin of certain forms of pre-oedipal guilt and the implications for a psychoanalytic theory of affects. *International Journal of Psychoanalysis*, **52**, 337-346.
- O'Conner, L. E., Berry, J. W., & Weiss, J. (1999). Interpersonal guilt, shame, and psychological problems. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 181-203.
- 大西将史 (2006). 罪悪感の概念整理と測定に関する研究 神戸大学発達・臨床心理学研究, **5**, 35-50.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析——対人恐怖から差別論まで—— 岩崎学術出版社
- 佐藤美恵子・三宅和夫 (1999). 日本人の恥と罪の自己意識の特徴 日本心理学会第63回大会発表論文集, 706.
- 繁栴算男・柳井晴夫・森 敏昭 (編著) (1999). Q & A で知る統計データ解析 サイエンス社
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. (1970). *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.
- Tangney, J. P. (1991). Moral affect: The good, the bad, and the ugly. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 598-607.
- Tangney, J. P. (1995). Shame and guilt in interpersonal relationships. In J. P. Tangney, & K. W. Fisher (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. pp. 114-139.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2000). *Shame and guilt*. New York: Guilford Press.
- Tangney, J. P., Wagner, P., & Gramzow, R. (1992). Proneness to shame, proneness to guilt, and psychopathology. *Journal of Abnormal Psychology*, **101**, 469-478.
- 谷 冬彦 (1997). 青年期における自我同一性の漸成発達の構造に関する研究 1996年度 新潟大学大学院現代社会文化研究科博士論文 (未公刊).
- 谷 冬彦 (2000). 青年期における「甘え」の構造 相模女子大学紀要, **63A**, 1-8.
- 豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析 [入門編] 朝倉書店
- Wrihley, C., & Neuhaus, J. (1955). The matching of two sets of factors. *American Psychologist*, **10**, 418-419.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 (2002). Amosによる共分散構造分析と解析事例 [第2版] ナカニシヤ出版
- Zung, W. W. K. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-67.

## Structure of Trait Guilt in Adolescents: Conceptualization of Guilt and Development of Trait Guilt Scale Based on Psychoanalytic Theory

Masafumi OHNISHI

Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16 No. 2, 171-184

First, the present study examined pre-existing guilt scales, and determined the aspects of trait guilt to be measured. Then, Trait Guilt Scale (TGS) was developed to measure the multiple aspects, and the scale's reliability and validity examined. Four components of trait guilt were hypothesized based on psychoanalytic theory: intra-psychic guilt, guilt of excessive gain, guilt of refracted "amae," and guilt for relation maintenance, and items for each were collected. A trait guilt questionnaire was administered to a total of 793 university students. Results of factor analysis supported the four factor model for the questionnaire. TGS, with 26 items, showed high internal consistency and good test-retest reliability. In addition, good concurrent validity for TGS was found in terms of the correlation with PFQ-2-Guilt scale, convergent validity in terms of the correlations with PFQ-2-Shame scale, Indebtedness Scale, and the Self-rating Depression Scale, and discriminant validity in terms of the correlation with Situational Guilt Inventory.

**Key words:** psychoanalytical conceptualization of guilt, trait guilt, Trait Guilt Scale (TGS), reliability, validity